

Community Cinema / Exhibitor's
Network Meeting 2005 In Kanazawa

コミュニティシネマ/上映者
ネットワーク会議 2005 イン 金沢

2005年11月11日[金]~12日[土]、金沢文化ホールにて開催！

「コミュニティシネマ/上映者ネットワーク会議」(映画上映ネットワーク会議改称)は、さまざまな場で“映画を見せること”を行っている人々の情報交換と研究討議の場として、1996年から毎年開催されているものです。

主に映画祭関係者、公共ホール・美術館・図書館の映像担当者、自治体の文化事業担当者、シネクラブの主催者、ミニシアターを中心とした興行関係者、自主上映団体、独立系配給会社等々が集まります。映画に興味のある方ならどなたでも自由にご参加いただけます。

日程:

会議:2005年11月11日[金]12日[土]

会場:金沢市文化ホール 〒920-0864 石川県金沢市高岡町15-1

映画上映:11月12日[土]、13日[日]

会場:金沢21世紀美術館 〒920-8509 石川県金沢市広坂1-2-1

主催: 金沢市

コミュニティシネマ支援センター

財団法人国際文化交流推進協会(エース・ジャパン)

共催:金沢21世紀美術館(財団法人金沢芸術創造財団)/国際交流基金

企画協力:金沢コミュニティシネマ推進委員会

支援:文化庁

会議参加費:2000円(11,12日共)/レセプション参加費:3000円

(映画上映は別途入場券が必要です)

問い合わせ:

コミュニティシネマ支援センター/エース・ジャパン

TEL | 03-5562-4422 FAX | 03-5562-4423

www.jc3.jp www.acejapan.or.jp

金沢市国際文化課 TEL | 076-220-2075 FAX | 076-220-2069

参加を希望される方は、別紙の申込用紙にご記入の上、

10月31日(月)までにファクシミリ(FAX.03-5562-4423)でご送付ください。

(ご出席申し込みに対しては、折り返し確認書をお送り致します。)

Community Cinema / Exhibitor's Network Meeting 2005 In Kanazawa

コミュニティシネマ/上映者ネットワーク会議 2005 ｲﾝ 金沢

10 回目の今年のテーマは――

芸術の創造力がまちを再生するー映画とまちの関係を考えるー

車社会の発展に伴って周辺に拡大を続ける街、幹線道路沿いに突如出現する大型店舗群。その全国一様な光景が増えるに従って、中心市街地は空洞化し賑わいを喪失しています。

かつては多くの都市で、映画館のある街路がその街の中心点を意味していました。そしてその街路の賑わいが周辺に様々な大衆文化の発信源を発生させました。中心を失った都市では人々の集まる施設は目的別に点として分散し、繋がりを失っています。金沢市では、1997年に13スクリーンあった街中の映画館が、2003年には一挙に1スクリーンに減少、“シネマ・ストリート”と呼ばれた場所に映画館はなくなってしまいました。

しかし、2004年の金沢21世紀美術館の開館は、空洞化が進む金沢の町に変化をもたらしました。芸術の創造力が都心に人を呼び戻しつつあるのです。

美術館とコミュニティシネマ、様々な芸術活動が複合的に展開されることによって、都市内に分散された文化・情報発信の点が繋がりを回復し、線となり、ネットワークが形成され、まちはにぎわいと人のつながりを回復するのではないのでしょうか。

今回の会議では、都市計画と連動した文化政策の成功例として国際的に評価の高いフランス・ナント市から文化事業の責任者であるジャン＝ルイ・ボナン氏を招き、文化を基軸に据えた都市計画の実例を聞きます。

もうひとつのテーマ、子どもたちと映画～映画上映と教育プログラム

この会議では、昨年から“映画教育”をテーマにしてきました。今回は、特に、小中高校生など若年層に対して映画をどのように伝えていくのかということ、“子どもたちと映画”の關係に焦点を当てます。美術や音楽といった芸術分野は、学校教育の中でもはっきりとその位置が定められ、履修科目にもなっており、学校内外で新しいプログラムが実践されつつあります。しかし、これまで、“芸術教育”の中で、映画・映像が取り上げられることはほとんどありませんでした。

将来におけるわが国の映画文化を豊かなものとしていくためには、多様な映画を受容できる観客の育成を真剣に考える必要があります。また、他の芸術ジャンル同様、映画に触れることは子どもたちにとって、魅力的でかけがえのない体験となるはずです。

他の芸術分野における教育プログラムの実践を聞きながら、その方法論を学び、映画教育の可能性を探ります。

Community Cinema / Exhibitor's Network Meeting 2005 In Kanazawa

コミュニティシネマ/上映者ネットワーク会議 2005 在 金沢 プログラム

11月11日[金]

13:00 開会 主催者挨拶

コミュニティシネマ支援センター「活動報告」 松本正道(コミュニティシネマ支援センター運営委員長)

13:40~15:30 基調講演「文化でよみがえるフランスの地方都市ナント市」(仮)

講師:ジャン=ルイ・ボナン(フランス・ナント市文化局長)

都市計画と連動した文化政策の成功例として国際的に評価の高いフランス・ナント市から、文化事業の責任者であるボナン氏を招き、話を聞く。

ジャン=ルイ・ボナン Jean-Louis Bonnin

1947年フランス・ボワチエ生まれ。1995年より現職。ナント市の文化事業、文化遺産、観光を担当し、年間予算4000万ユーロ(約55億円)、職員600人を統括する責任者。地域のアイデンティティや文化的催しの芸術性、財政などの側面から自ら分析・決定を行う。フランス各地で文化政策の専門家として業績を残す、地方文化行政のベテランである。

15:40~16:30 コミュニティシネマに関する事例報告 プレゼンテーション

「公設民営映像ホール実現に向けて」(川崎市/野々川千恵子)

南北に長くのびる川崎市、北部の中心地である小田急線「新百合ヶ丘駅」周辺で毎年10月に開催される「KAWASAKI しんゆり映画祭」は、今年で11回を数える。多くの市民が映画祭実行委員会に参加、「ジュニア映画制作ワークショップ」や「夏休み野外上映」など映画祭の枠を超えた活動も展開、高い評価を得ている。この映画祭開催地である新百合ヶ丘に川崎市の新しい文化施設が建設されることになった。映像ホールを核としたコミュニティシネマ“公設民営のシアター”は実現されるだろうか?

「金沢市のコミュニティシネマ構想」(金沢市/土肥悦子)

金沢市では、2003年に映画館シネモンド、金沢21世紀美術館、などが中心となって「金沢コミュニティシネマ推進委員会」が設立された。その後、金沢コミュニティシネマでは、“まちなかに映画館を取り戻そう!”を合言葉に、金沢コミュニティ映画祭、子ども映画教室を開催、21世紀美術館シアター21で定期的上映会「映画の極意シリーズ」を企画するなど、積極的に活動を展開、さらなる発展を目指している。金沢コミュニティシネマの将来への展望を聞く。

16:40~18:30 ディスカッション I 芸術の創造力がまちを再生する-映画とまちの関係を考える-

司会: 小野田泰明(東北大学大学院工学研究科助教授)

金沢市出身。1998-99 UCLA客員研究員。建築のハードとソフトをつなぐ新しい職能である建築計画者として「せんだいメディアテーク」の他、各地で先駆的プロジェクトに関わる。劇場・ホール研究で1996年日本建築学会奨励賞、熊本県苓北町民ホール設計で2003年日本建築学会賞受賞(阿部仁史氏と共同受賞)。著書、「オルタナティブ・モダン」(共著、TNプロープ)、「プロジェクト・ブック」(共著、彰国社)他。

パネリスト:

ジャン=ルイ・ボナン

養豊(金沢21世紀美術館館長/金沢市助役)

金沢市出身。カナダのモントリオール美術館東洋部長、アメリカのシカゴ美術館東洋部長、ミシガン大学客員教授など海外での経験も豊富で、国内でも美術、館運営両面の専門家として評価を得ている。2005年より、金沢市助役。

立木祥一郎(青森県文化振興課美術館整備学芸グループ学芸主査)

1987年より川崎市市民ミュージアム映像部門学芸員として「レンフィルム祭」等の映画祭を手がける。1994年より総合芸術パークおよび青森県立美術館整備プロジェクトに参加。2002年、弘前市の旧酒造倉庫で延べ3500人のボランティアで実行した「奈良美智展」を企画。このグループを母体にアートNPO「harappa」を設立。2006年に開館する青森県立美術館では、映画事業も積極的に展開する予定。]

19:00~ レセプション(会場:金沢ニューグランドホテル)

11月12日[土]

10:00～11:15 芸術教育プログラムに関する報告:

その1:「アーティストと子どもたちの出会い～ASIAS(Artist's Studio In A School)の試み」(仮)

堤康彦(特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち代表)

87年から10年間、東京ガス株式会社に勤務。その間に超高層ビルの建設及び運営業務に携わり、数々の舞台公演や展覧会を企画・プロデュース。その後、芸術普及NPO「アーツフォーラム・ジャパン」の事務局や大阪府立大型児童館「ビッグバン」事業企画部の勤務を経て、99年秋から、現代芸術家を小学校に派遣し、教員と協力しながらワークショップ型授業を実施するプロジェクト＝ASIASを企画、翌年7月からスタートさせる。活動の拡大に伴い、01年7月「特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち」設立。

その2:「フィルム・アーカイヴにおける教育プログラムの可能性」(仮)

岡島尚志(東京国立近代美術館フィルムセンター主幹)

1979年から、フィルムセンターの上映・保存・調査・出版・国際交流事業、各種イベントの企画・運営に携わる。代表的なキュレーション番組に「ラオール・ウォルシュとその時代」(86)「知られざるアメリカ映画」(93)「日本映画の発見」(96～02)「ハワード・ホークス映画祭」(99)「韓国映画—栄光の1960年代」(02)等。国際フィルム・アーカイヴ連盟(FIAF)運営委員(03～)。2005年より現職。

11:20～12:30 ディスカッションⅡ 子どもたちと映画～映画上映と教育プログラム

司会:内藤篤(弁護士、ニューヨーク州弁護士、慶応大学法科大学院非常勤講師)

映画・音楽・演劇・出版・プロスポーツ等のエンターテインメントおよびメディア関連の法実務が専門。著書「ハリウッド・パワーゲーム/アメリカ映画産業の『法と経済』」(TBSブリタニカ)「走れ、エロス!」(筑摩書房)「エンターテインメント・ロイヤルの時代」(日経BP)「エンタテインメント契約法」(商事法務)等。訳書「エンターテインメント・ビジネス—その構造と経済」(リットーミュージック)「米国著作権法詳解」(信山社)他。

パネリスト:

堤康彦/岡島尚志

西嶋憲生(多摩美術大学芸術学科教授/映画評論家)

1970年代後半から映画・映像芸術の研究者として執筆・翻訳の傍ら、実務家としてフィルムアート社で映画書の編集、「月刊イメージフォーラム」編集長など。愛知芸術文化センターや川崎市市民ミュージアムの委員を務めた後、現在、多摩美術大学教授。著書「生まれつつある映像—実験映画の作家たち」(文彩社)、共著「映像表現の創造特性と可能性」(角川書店)、編著「映像表現のオルタナティブ」(森話社)、訳書「アンディ・ウォーホル・フィルム」(ダゲレオ出版)など。

黒沢伸(金沢21世紀美術館学芸課担当課長補佐/エドゥケーター)

東京芸術大学大学院美術研究科修了。水戸芸術館現代美術センター学芸員を経て、1999年より金沢市都市政策部美術館建設事務局に勤務。金沢21世紀美術館の基本設計・実施設計、アウトリーチプログラムとしてのプレイベントの実施、コレクションの形成にかかわり、特に建築と一体化したコミッションワークの導入を企画・担当。また、開館にあわせて市内の小中学生4万人全員を美術館に呼ぶ「ミュージアム・クルーズ・プロジェクト」を企画・実施したほか、アーティスト・イン・レジデンスプログラム等を担当している。

(休憩)

14:00～16:00

コミュニティシネマに関するフリーディスカッション「ふたたび“コミュニティシネマって何?”」

コミュニティシネマ活動が本格的に始動して1年余りが過ぎました。各地ではどんなコミュニティシネマが活動しているのでしょうか? 各地の上映活動の現状と問題点、を自由に話し合います。

司会:茂木正男(NPO 法人たかさきコミュニティシネマ/シネマテークたかさき代表)

映画上映:金沢コミュニティ映画祭関連企画 「アピチャッポン・ウィーラセタクン監督特集」

共催：国際交流基金 協力：山形国際ドキュメンタリー映画祭実行委員会

コミュニティシネマ/上映者ネットワーク会議は、「金沢コミュニティ映画祭 2005」と同時期に開催される。今回の「金沢コミュニティ映画祭 2005」の関連企画として、現在、最も注目を集めるタイ映画の異才アピチャッポン・ウィーラセタクン監督の小回顧上映を行う。ここで上映された作品は、他のコミュニティシネマへも巡回可能。

上映プログラム(予定)

11月12日(土)

17:30～ トロピカル・マラディ(118min) ※予定 上映後トーク

11月13日(日)

10:30 アイアン・ブッシーの大冒険(90min) 上映後トーク

13:00 プリスフリー・ユアーズ(125min) 上映後トーク

16:00 真昼の不思議な物体(83min) 上映前監督挨拶あり

アピチャッポン・ウィーラセタクン Apichatpong Weerasethakul

1970年 タイ・バンコク生まれ

タイで建築を学んだ後、アメリカで映像制作を学ぶ。1990年代の初めからフィルムやビデオを使い映像表現を始めた。彼の映像制作はこれまでのタイの映像制作のシステムに属さず、タイのテレビやラジオの番組、マンガ、古い映画などから要素を用い、また周辺国の小さな街の情景からもインスピレーションを受け、作品に活かしている。プロの役者ではない出演者を用いたり、ドキュメンタリーとフィクションの間を行き来するような即興性の強い映像を作り出す。2000年に制作した「真昼の不思議な物体」が、山形ドキュメンタリー映画祭でインターナショナル・コンペティション優秀賞を受賞するなど、多くの国際映画祭で評価された。その後2002年には『プリスフリー・ユアーズ』がカンヌ映画祭である視点部門グランプリを獲得、世界的に注目を集めた。

【フィルモグラフィ】

1993年 『弾丸』

1994年 『0116643225059』16分『キッチンとベッドルーム』

1995年 『絶え間なく打ち寄せる激しい波のように』

1996年 『米、アーティストマイケル・シャワナサイのパフォーマンス』

1997年 『タイ映画の100年』『第3世界』山形国際ドキュメンタリー映画祭アーカイブ

1998年 『ゼロを食べるルンガラ』

1999年 『窓』7分『マレーと少年』27分

2000年 『秘密の情事』(ティラナのために)

『真昼の不思議な物体』「バンクーバー国際映画祭」特別賞、「ヴィレッジ・ヴォイス」誌「ベスト・オブ 2000」「韓国・第2回ジョンジュ国際映画祭」グランプリ、「山形国際ドキュメンタリー映画祭」インターナショナル・コンペティション優秀賞とNETPAC 特別賞

『真昼の少年』23分『真昼の少年／夜の少女』『幽霊のいる家』60分「イスタンブールビエンナーレ」出品、「イスタンブールビエンナーレ東京」展出

2002年 『プリスフリー・ユアーズ』「カンヌ映画祭」ある視点部門グランプリ、「第3回東京フィルメックス」最優秀作品賞

2003年 『アイアン・ブッシーの大冒険』東京国際映画祭「アジアの風」部門上映

2004年 『トロピカル・マラディ』「第3回東京フィルメックス」最優秀作品賞